

2014年は 日米開港160周年

160年前の 出来事

今年2014年は下田開港160周年の節目の年です。1854年、ペリー提督をはじめとした使節団がペリーロードを歩いて了仙寺に向かった瞬間、下田は日本で特別なまちとなりました。古来より日本はほかの国との交流が無かったわけでもありません。遣唐使や遣隋使など、日本は多様な文化を取り入れ、発展してきました。鎖国政策を敷いていたとはいえ、長崎の出島ではオランダや中国との交流は続いていました。しかし、近代の日本において今日までの素晴らしい発展の出发点は欧米諸国への門戸を開いた下田開港と言っても過言ではないと思います。近代的な知識を取り入れ、徳川幕府から明治政府に移り変わり、日本という国は劇的な成長を遂げていきました。そして、下田にとって日米開港の舞台となった歴史的事実はその後のまちのかたちづくりに大いに影響しました。

ペリー提督の来航は一時的なものでしたが、その後、1856年8月、米国総領事タウンゼント・ハリスが下田の地に足を踏み入れます。

当初は拒絶の姿勢を見せていた幕府ですが、ハリスの主張を受け入れ、柿崎の玉泉寺を宿舎として下田に滞在し、通商条約の交渉に臨んだのです。玉泉寺は日本初の総領事館となり、米国旗が高らかに翻ったのでした。

また、玉泉寺には日米和親条約付録十三か条(下田条約)により、米国人の埋葬地としても指定されており、現在でも日米開港の交渉のなか、不幸にも事故で異国の地に消えた5名の米国人、ロシア人4名が静かに眠っています。

毎年、賑やかなパレードや、花火大会、楽しい露店や日米交流など様々なイベントが行われる黒船祭ですが、16日の金曜日に玉泉寺で米海軍主催の慰霊祭が行われます。

この慰霊祭の意味は非常に深く、この儀式があるからこそ、黒船祭は米国に重要視され、昭和8年から脈々と続け、下田のメインイベントとなっています。

続く交流 続く絆

日米開港の舞台となったことにより、下田では多くの歴史や物語が生まれ、下田は深みが増し、その後の観光地・下田としての揺るぎない土台となりました。

また、ペリー提督の生誕地である、米国ニューポート市と昭和33年に姉妹都市提携が締結され、それから50年以上もの間、強い絆で結ばれた国際交流が続いています。

現在まで、中学生を含め400名近い市民が代表団としてニューポートを訪問し、ニューポートの黒船祭などに参加、ニューポートからも300名ほどの方々が下田の黒船祭に参加しています。

同じく姉妹都市提携を結んでいる山口県萩市との縁も幕末、吉田松陰が米国渡航への夢を叶えるため、下田に滞在し、外国船への乗船を試みた史実から端を発しています。

開港場として下田が選ばれなかったとしたら、このような交流は生まれなかったことでしょう。

開港の意味

江戸初期、海の関所として栄えた下田は関所の機能が神奈川の浦賀に移ったことにより、活気が失われてしまいました。その後、幕末に開港場として指定され、一時は元気を取り戻したかに見えましたが、数年で開港場としての役目を終えてしまいました。

しかし、この史実は永遠にゆらぐことはありません。風光明媚で世界一の海づくりに取り組むことのできるほど自然豊かな下田。

それだけでも観光地としての十分に魅力あるまちですが、幕末開港の歴史が下田の魅力は何倍にも引き出しています。そして忘れてはならないのが、下田は日本で初めて一般の人達が外国人とふれあえたまちです。

これが開港して一番幸せな出来事だったかもしれません。私たちのおじいさんのおじいさんぐらいの下田の人々は身近で外国人と接し、当時最先端の異文化交流を送ることができたのですから。

昭和9年、第1回黒船祭の様子です。当時の華やかさがにじみ出ています。